



親鸞の生涯 25

恵信尼の手紙

越後流罪を赦免された親鸞は当然法然さまの居ます京都へ帰るはずであったがその法然様は翌年亡くなってしまった。

法然さまの書き残された『選択本願念仏集』の真実を正しく伝承し伝道したい。親鸞はその一念から関東に向けて家族もろとも旅立った。四十二歳のころであった。この旅路は妻子づれであり困難に満ちた草枕であった。乞われるまま善光寺の聖(ひじり)となったこともあったかもしれない。

当時は日本史でも珍しい日本列島大地震が毎月のように襲った時期。早魃・洪水が相い続き、農民庶民は塗炭の苦しみのなかにあった。そういう時代背景のなかでの親鸞を伝える恵信尼さまのお手紙の一節。

夫親鸞さまは、寛喜三年四月十四日

(癸丑年)の昼過ぎころから、風邪(こ)ちで、その夕方から床に伏して危険な状態になっておいでですのに、腰や肘をうたせることなく、看病人も寄せ付けずただ音もなく静かに伏せておいででした。体に触ってみますと火のような熱さで、頭痛の激しさも一通りではありません。

さて、臥して四日目の明け方、苦しい息のなかで「まは、さてあらん(成るほど)、そうだったんだ」とおっしゃるので

「何事でしょう。うわごとをおっしゃったのですか」と言いますと、「いや、うわ言やたわごとではない。実は、臥して二日目から、『大無量寿経』をずっと読み続けている。たまたま目を閉じると、そのお経の文字が、一字も残らずハッキリと見えてくる。ハテさてこれは一体なんだろう、念仏の信心よりほかに、一体どんなことが気になるのか。とよくよく思案して見ると、ああ、そうだ、十七・八年ばかり以前、最もらしく「三部経を千部読んで庶民救済のために尽くそう」と念じて読み始めたが、これは一体なん

たることか。善導様(法然さまの先生。中国の人)でさえ「自信教人信。難中転更難」(自分が信じ、それを人に教える。しかしこれは困難のなかでも最も困難なことなみ。そうと知って、その私のうえに働いてくださる如来の大悲に報じさせ

ていただきなさい)とおっしゃっている。その呼び声がお念仏。そのお念仏のほかになんの不足があつて一途に経を読み祈ろうとするのかと思ひ返して読経をやめたのではあつたが、既に捨てたはずの比叡で習い覚えた念仏三昧の聖道修行のころや、自己へのこだわり、いまこそよく考えなおさねばなるまいと反省してからは、読経は中止した。そういうことで病臥して四日目の朝、「ああ、そうであつたか」といったのです。とおっしゃつて、やがて流れるほど汗を流し、よくおなりになりました。

如来の大悲はいつでもどこでもだれにでも普ねく展開してくださる。そのことにすなおにハイと答えさせていただく、それが真実の信心。(賜わる念仏)

善導大師や法然さまから教えられていた親鸞ではあつたが、目前の惨憺たる民衆の苦難をみると、自分の「祈りの念仏」のちからで衆生救済の思いがこみ上げてくる。(祈りの念仏)

この葛藤が、親鸞にはいつまでつづいたのだろうか。



八月 葉月のこよみ

- 一日(金) 島根瑞泉寺法事
- 二日(土) 出瑞自承寺法事
- 三日(日) 銀杏会(広島)
- 四日(月) 平野 浩二さま初盆
- 五日(火) 保谷 日殿・唐川益参り
- 六日(水) 市場益参り
- 七日(木) 東里・相田・矢根益参り
- 八日(金) 朗読ボランティアあすなる
- 九日(土) 和屋・榎見益参り
- 十日(日) 大石 昌一さま一周忌
- 十一日(月) 斎藤 節夫氏宅法事
- 十二日(火) 山田 豊さま初盆
- 十三日(水) 山田 弘さま初盆
- 十四日(木) 宮嶋 一子さま初盆
- 十五日(金) 森戸 初枝さま初盆
- 十六日(土) 榎見益参り
- 十七日(日) 出石A盆参り
- 十八日(月) 出石B盆参り
- 十九日(火) 出石C盆参り
- 二十日(水) 西岡 桂子さま初盆
- 二十一日(木) 岩上三喜夫さま初盆
- 二十二日(金) 成田 武夫さま忌明法事
- 二十三日(土) ことども研修会
- 二十四日(日) 稲木 靖彦氏宅法事
- 二十五日(月) 木村 綾子さま忌明法事
- 二十六日(火) みのりを聞く会
- 二十七日(水) あすなる(録音)
- 二十八日(木)

葬儀

七月 九日

木村 綾子 さま 榎見

八十六歳

念仏の旅

新米門徒



養父が突然他界しました。そこで図らずも妻と二人で今度の旅行に参加しました。

勝林寺さんでは、ずっと昔から毎年、この「納骨参拝研修旅行」を行っていて、一年間の遺骨を、ご本山の大谷本廟の納骨堂に納めます。そのお世話には、仏婦や仏壮の方々がしてくださいます。大抵バス一杯の人数になるようです。納骨式はご院家さんと一緒にお経を唱えながら大勢で行いました。

この納骨参拝を終えたあと、一泊二日の研修旅行です。今年の名古屋の向こうの「三河湾国定公園三ヶ根山」までの長距離旅行で、途中、壮大な植物公園や海産物マーケットなど盛りだくさんでした。

この研修旅行で、学んだことの一つに、「念仏」があります。

全日程のお世話をしてくださるN氏。こまめに活発に明るくお世話をしてくださりながら、ことごとく「むんまんだが、ナンマンダブ」と念仏なさるのです。ちょっと失敗して謝るときにも「なんまんだが」です。

はじめは研修旅行のリターの役柄から念仏なさるのかと思っていました。旅行中、だんだん時がたっても、「なんまんだが」。

隣の席の仏壯の役員の人に聞いてみました。「ありゃー、習慣で、どないしても止められないのでしょー」。「あの人のおやしさんからの遺伝かもしれませぬ」。「別に阿弥陀さんに感謝してばかりじゃーないと思えますが」

義父の忌明け法事のときご院家さんに聞いて見ました。

「南無阿弥陀仏」のお念仏は私がかを念じてと覚えていたのではない。如来さまが「いつでもどこでも。誰でも。目覚めさせたい、救いたい」と願いをかけ呼んでくださる声です。おりに触れて私の口から出てくださるお念仏を、私はただ聞いて、「願われている身」のしあわせを欲ばせていただくだけ。

Nさんは、意識しないのに、ついついどこでも出てくださる念仏は、止めようがありません、と言っておいででした。Nさんの息子さんには「電話でも、いつもナンマンダブって、ことば毎に言うので、こっちはなんだか有り難くなっています」といっておられました。

Nさんの父親、祖父も同じようでした。Nさんの家の庭先に、この秋までに碑が建ちます。それに刻(きざ)んだ「常照」の文字。正信偈の「煩惱に眼(まなこ)障(さ)えられて見えずとも、如来の大悲は倦(う)むことなく常に我を照(あ)りしめたも」(人間の目は煩惱におおわれてしまっていて、自分勝手にしか見えず、真実まことのものは見えないが、にも拘わらず真実からのほたらき如来の慈悲はいつでもどこでもだれでも(ことに極悪の凡夫私を)照らし続けていて下さるのだ)。源信という方の言葉です。

全戦戦況及び追悼

孟蘭盆会法要

第二次世界大戦に日本が敗れたのは昭和二十年(1945年)。それからすでに六十余年が過ぎてしまいました。その間、わたしたちは科学技術の進歩や経済生活の豊かさに酔い痴れ、戦争の悲惨な実態を忘れ去ってしまったのではないのでしょうか。

勝林寺では「満州開拓移民団の集団自決」のこともあって、敗戦後一貫して毎年追悼法要を勤めてきました。

戦死者・戦争犠牲者の直接のご遺族は年々減少します。しかし、この法要はご遺族だけのもではありません。いまや、政治・経済あらゆる分野に軋轢・紛争の火が兆しつつあります。

ウランバナ(孟蘭盆)とは、長期研修会(あんご)の最終日に全員「自己反省」を課したお釈迦様の教えから始まった仏教の大切な伝統行事です。

戦争のあの悲惨な現実をご縁に、いまのこの私をお念仏に問うて見なければなりません。八月八日 午後2時 挙ってお参り下さい。



和顔愛語 わげん あいご

色紙を書かなければならないことがあり、好きなことは『大無量寿経』の「和顔愛語先意承問(せんいしようもん)」と書きまじたら言葉の意味も要求されました。わたし流に「ほほえみと、やさしいことば」と「思いやり」と記しました。先意承問を「思いやり」と訳していいものかどうか気になります。相手の気持ちを察して、こちらから先に丁寧に向うこと。「お寒くありませんか」「お持ちしましょうか」と先に丁寧に聞いてあげる思いやりのことであるといたでているからです。

元京都女子大総務部長

立川 昭乗先生

(天蔵寺寺報より転載)

邯鄲一炊の夢

(かんたん いっすいの ゆめ)

貧乏書生の盧生(ろせい)は中国河北省の「邯鄲」というところに旅をした。道ばたの茶店にいた仙人呂翁から借りた青磁の枕で眠った。枕の中の世界に吸い込まれて五十年余りを過ごし、栄枯盛衰・喜怒哀楽を味わい尽くした。

しかし、目覚めて見ると、なんと、眠りこむむ前に茶店の主人が炊きはじめた高粱飯(こうりやんめし)がまだ炊きあがってはいなかった。

唐の時代の小説「枕中記」にあるこの話は、「邯鄲の夢」とか「一炊の夢」と言って、人の一生、栄枯盛衰も、それは一場の夢にすぎないとの意味で用いられるようになった。

「浅き夢見じ 酔ひもせず」

「荷為(栄枯盛衰、有為転変)の奥山、今日越えよ」

との仏陀のおさとしがわが胸をうつ八十四歳のこのごろである。

